海をわたる動物園

Alicekan

目次 contents

プロローグ 4

ひいじいちゃん、飼育員になる 10

本物の負け犬 26

キリンのツノ 32

命の活かしかた 42

元気があっても、なくっても 55

ヤシの実ジュース 69

動物いろいろ 76

百獣の王は、ダチョウか？ライオンか？ 81

ジャンク 90

長い夜 98

六甲山 113

エピローグ 120

あとがき 122

Alicekan

キリマンジャロ　撮影：今村俊輔（シュン）

プロローグ

川沿いの遊歩道に続くゆるやかな坂をのぼりきると、川面を渡る風がひいじいちゃんの白髪をふわふわっとゆらした。

「おっ、いい風だなぁ」

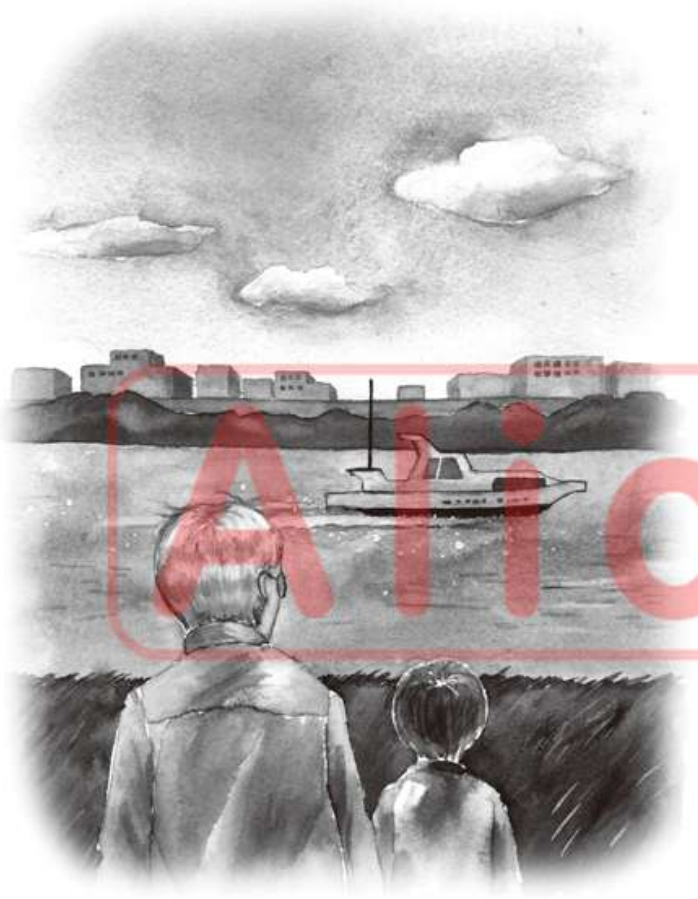
「うん。海のにおいがするね」

東京湾へ流れこむ江戸川は、広い川をはさむように小高い堤防が海まで続いている。

「あっ、船だ！　ねえ、ひいじいちゃん。あの船、海まで行くのかな？」

「ああ、そうだなぁ」

「もしかして、海の向こうまで行くのかな？」



Alicekan

「うーん、外国まで行くには、船が小さすぎるな。ああ、そういえば、じいちゃんは若いころ、大きな船に乗って外国へ行ったことがあるよ」
「えっ？　外国へ行くのにわざわざ船で行ったの？　ひいじいちゃんが若いころは、まだ飛行機はなかったの？」
「ははははっ。こう見えてもじいちゃんは、昭和の生まれだぞ。飛行機ぐらいあったさ」
「えへへっ。そうだよねぇ」
「君は知っているかな？　じいちゃんが子どもだったころ、世界中を巻きこんだ大きな戦争があったんだ」
「うん。学校で習った。日本でもたくさんの人が亡くなったんだよね？」
「ああ、そうだよ。長い戦争が終わると、東京は見渡す限りの焼け野原になっていてね。住む家も食べるものもない人たちは、その日一日を生き延びるのが精いっぱいで、それから何年も飛行機どころか、外国へ行こうなんて考えることができなかったんだ」

「ふーん」
「けれども、じいちゃんが大きくなって大学へ行くころには、日本の国もだいぶ元気を取りもどしていてね。飛行機は料金が高くて、じいちゃんには乗れなかったけれど、船を使えば、どうにか外国へも行くことができるようになったんだ」
「へえー、そうなんだ。それでひいじいちゃんは、船に乗ってどこへ行ったの？」
「最初に行ったのは、アフリカだったかなぁ」
「えーっ、アフリカ？　ゾウやキリンのいる？」
「ああ、そうだよ。じいちゃんは、写真を撮るのがすきでね。子どものころから『カメラマンになりたい』って夢があったんだ。だから大学の友人たちといっしょに、まだだれも見たことのない風景を撮るために、赤道直下のアフリカへ、キリマンジャロの写真を撮りに行ったんだ」
「ぼく、ひいじいちゃんの部屋で大きな山の写真を見たことがあるよ。あれがアフリカのキリマンジャロ？」

Aicekan

「ああ、そうだよ。キリマンジャロは、富士山より二千メートルも高い大きな山でね。じいちゃんが見た七十年ぐらい前は、山頂が今よりも分厚い雪と氷におおわれていて、初めて見た時には、その神々しい姿に、息をするのも忘れるほどだったよ」

「へえー、暑い国でも、高い山には雪や氷があるんだね。それで、七十年前のアフリカにも動物はたくさんいたの？」

「ああ、いたとも。山へ向かう途中の広大なサバンナでよく見かけたのは、シマウマやダチョウやトムソンガゼル。アカシアのしげみの近くでは、ゾウや背の高いキリン。それから、今は密猟者のせいで絶滅が心配されている大きなツノを持ったクロサイの親子も見かけたよ」

「わあ、いいなぁ」

「いつか機会があったら行ってごらん。サバンナをふく風は、さわやかなハッカのような草のにおいがするから。ああ、そういえば、アフリカから帰る船は、キリンやカバといっしょだったよ」

「えっ？　ひいじいちゃんは、キリンやカバと船に乗ったことがあるの？」

「ああ、そうだよ。昔は『貨客船』といって、人と荷物をいっしょに運ぶ船が多かったんだ」

「へえー」

「そうそう、その時、ちょっとした事件があってね。じいちゃんは、日本へ帰るまで船の上で動物の世話を手伝うことになったんだ」

「えっ、動物の世話ってキリンやカバの？　ねえねえ、ひいじいちゃん。その話もっとくわしく聞かせて」

「ああ、いいとも」

ひいじいちゃんは、川を見下ろすベンチにこしを下ろすと、ゆっくりと語りはじめた。

「あのころ、じいちゃんは、まだ二十歳をすぎた大学生で、いっしょにアフリカへ行った仲間からは『シュン』と呼ばれていたんだよ」

Aicekan

ひいじいちゃん、飼育員になる

「おい、シュン。最新式のデカい船があるぞ！」

昭和三十年（一九五五年）二月。

ケニアのモンバサ港で、ぼくらは、日本へ向かう船を探していた。いっしょにいたのは、大学の先輩でグループのまとめ役だった関根さんと、同級生だけれどぼくよりひとつ年上でしゃべりずきな山本さん。三人そろって大きなリュックサックを背負い、赤土の砂ぼこりが舞うモンバサの埠頭を歩いていた。

「うわあ、本当に大きいですねぇ、山本さん。まるで海にうかんだお城みたいだ」

「あーっ、こんな船に乗れたらなぁ。来るときに乗った船は、本当に海をこえられるのかと思うほどオンボロで、ゆれもひどかったからなぁ」

「えっ、関根さんもですか。ぼくもあの貨物船は、本気でしずむんじゃないかと思いました。でも、手伝うことを条件に、ただ同然で乗せてもらった船ですから、仕方ないですよ」

「おい。あれはいったい何のさわぎだ？」

山本さんが指さしたほうを見ると、そこにはモンバサの港で働くアフリカの人たちが大勢集まっていて、何やら異様な雰囲気をただよわせていた。

さわぎの中心は、あの大型船が横付けされている岸壁で、これから船に積みこむための大小さまざまな木箱や、太い針金で長方形にたばねられた干し草のブロックが、ところせましと置かれていた。

少しはなれたところから様子を見ていると、その木箱の一つから、殺気立った動物のうなり声のようなものが聞こえてきた。そして、それにおどろいた作業員が悲鳴をあげ、またそれを聞いたほかの作業員が大声をあげ、そうしていつの間にか、頭にかごをのせ

Aiceka

た土産物売りの女性や近くで遊んでいた子どもたちまでが、やじ馬となってそこへ集まっていた。

重たい荷物を背負ったぼくらの横を、はだしでかけぬけていった子どもたちの会話から「シンバ」（ライオン）というスワヒリ語の単語が聞きとれたと、山本さんがじまんげに言うので、ぼくらも「ライオンが間近で見られるのなら」と、さわぎの中へ入ってみた。すると、一番手前に置かれていた二階建ての家ほどの高さがある木箱から、突然長い首をゆらゆらさせてキリンが顔を出したので、ぼくはおどろいて、ぽかーんと見上げてしまった。

「ガウガウ」という、けたたましい鳴き声にふり返ると、そこに置かれた木箱には、どれもがんじょうそうなあみや鉄さくが取り付けてあって、その一つ一つにダチョウやキツネ、カバやシマウマなど、アフリカの野生動物が一頭ずつ収められていた。ほとんどの動物は、飼育箱のすみの暗がりで、できるだけ体を小さくして辺りの様子をうかがっていたけれど、中には、興奮して暴れている動物もいた。

「なんだか小さかったころ、一度だけ見たサーカスみたいだぞ」

ぼくはすっかりうれしくなって、アフリカの人に混じって飼育箱の中身を一つ一つ見て歩いた。残念なことに、どの箱の中にもライオンの姿は見あたらなかったけれど、その代わりに、灰色がかった背中の模様がめずらしい、ワイルドキャットを二頭見つけた。

「関根さん、アフリカの人でもこんなに間近で野生の動物を見るのは、めずらしいことなんでしょうか？」

「そりゃあ、そうだよ。もし、サバンナの真ん中でこんな凶暴なやつらにばったり出くわしてみろよ、『あっ』と思った次の瞬間には、もうやつらの腹の中だぞ」

「ひゃあ。日本にはこんな危険な動物がいなくてよかったぁ」

ぼくと関根さんが飼育箱の前で話しこんでいると、少しはなれたところで山本さんがぼくらを手招きした。

「おおい、シュン。おれたちが予約している船の名前って、なんだっけ？」

「ええっと、『サントス丸』です。新しく就航した日本の貨客船で、南米のブエノスア

AIcekan

イレスからアフリカ、セイロン（現スリランカ）、シンガポールを通って、日本まで行く定期船だそうですよ」

ぼくがそう言うと山本さんは、少しもったいつけたように、

「そうか。おどろくなよ。これがその『サントス丸』だ！」

と、手をふりあげて大げさなそぶりで言った。

「えーっ、この船が？」

改めて船を見上げてみると、黒と赤茶色にぬり分けられた船体には、真っ白いペンキで「サントス丸」とはっきり書かれていた。そして、甲板の後ろから空へつき出した銀色のポールには、日本の船だということを示す日の丸が潮風にはためいていた。

「おおー。帰りはこんなにいい船に乗れるのかぁ」

「よかったですねぇ、関根さん」

まだ新しいサントス丸は、水にぬれたクジラの背中のように黒々と光っていた。

「あれ？　それじゃあ、もしかして、今積みこんでいる動物は、日本まで行くのかな？」

Alicekan